

乳頭吸啜刺戟の分娩への影響

高知医科大学産婦人科教室

武田佳彦, 橋本雅

研究目的

妊娠後期妊婦に乳頭吸引刺戟を加え乳管開通を促進させることにより、分娩後の母乳栄養の早期確立をはかることができるかどうかを検討するのが本研究の目的である。

乳頭吸引刺戟により子宮収縮がおこることは広く知られており、したがって乳頭刺戟により分娩陣痛が誘発される可能性が考えられる。そこで今回は乳頭吸引刺戟の分娩に及ぼす影響について検討を行なった。

研究方法

高知医大産婦人科外来を受診した合併症のない37週以降の妊婦を対象とし、non stress testを施行し、reactiveであり子宮収縮のみられないことを確認した後、搾乳器を使用し、乳頭吸引刺戟を加えた。吸引の強さは、患者が疼痛を感じない最大の圧とし、左乳房から右乳房の順序で各5分間吸引した。子宮収縮の認められた症例については、CTG上子宮収縮がみられなくなるまで、経過を観察した。

各症例について施行時の在胎週数、Bishop score、乳頭刺戟より分娩までの日数、分娩時間、分娩時合併症、児体重、Apgar score、母乳栄養確立のパーセント、確立の日齢について検討した。

研究成果

乳頭刺戟を行った30例のうち、16例にCTG上の子宮収縮がみられたが、他の14例では子宮収縮は(-)であった。そこで以下、子宮収縮(+)群を子宮収縮(-)群との二群に分け、検討を行った。NSTは全例reactiveであったが、子宮収縮(+)

群の1例でdipがみられた。

乳頭刺戟を行った在胎期間は、(-)群で268日、(+群)で269日と差はなかった。

経産回数との関係では、子宮収縮(-)群では8:6と初産婦が多かったのに対し、(+群)では6:10と経産婦が多かった。

Bishop scoreを見ると、子宮収縮(-)群では平均4.2であったのに対し、(+群)では5.7と高い傾向にあった。

乳頭刺戟より分娩までの日数は、子宮収縮(-)群では6.7日、(+群)では3.9日と促進された。また刺戟後2日以内に分娩となったのは両群あわせて45%であった。

分娩時間は子宮収縮(-)群では9.0時間に対し、(+群)では8.0時間と少し短い傾向にあった。分娩時合併症は両群ともに特別なものはなかった。

新生児に関しては、(-)群で男児が、(+群)で女児が多い傾向であったが、児体重、Apgar scoreともに両群間に差はなかった。

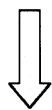
母乳栄養確立に及ぼす乳頭吸引の影響については、乳頭刺戟妊婦で平均60%、確立日4日目と対照群とほぼ同様あるいは多少高い傾向であった。特に子宮収縮(-)群での44名に対して、収縮(+群)では72.5%と高値であった。

考案

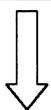
乳頭吸引刺戟を加えた場合、経産婦あるいはBishop scoreが高い症例に、子宮収縮が起る頻度が高かった。乳頭刺戟より分娩に至るまでの日数では分娩促進効果がみられた。また、分娩時間・分娩時合併症等に対する影響はないと考えられた。

	子宮収縮(-)群	子宮収縮(+)群
児体重(g)	3098±322	3193±438
Apgar Score	8.9±0.5	9.0
児性別♂:♀	9:5	7:9
母乳栄養確立%	44.0%	72.5%
母乳栄養確立日	3.7±1.8	4.1±1.4

	子宮収縮(-)群	子宮収縮(+)群
症例数	14	16
NST	全例 reactive	全例 reactive
施行日在胎日数	268.2±8.1	269.4±6.0
初産婦:経産婦	8:6	6:10
施行日 Bishop Score	4.2±3.3	5.7±1.0
乳頭刺激→	6.7±5.7	3.9±3.2
分娩までの日数	8.6±6.0	7.6±7.1
分娩時間(時間)	9.0±7.8	8.0±5.5
分娩時合併症		
Fetal Distress	0	1
臍帯巻絡	2	0



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

妊娠後期妊婦に乳頭吸引刺戟を加え乳管開通を促進させることにより,分娩後の母乳栄養の早期確立をはかることができることがどうかを検討するのが本研究の目的である。

乳頭吸引刺戟により子宮収縮がおこることは広く知られており,したがって乳頭刺戟により分娩陣痛が誘発される可能性が考えられる。そこで今回は乳頭吸引刺戟の分娩に及ぼす影響について検討を行なった。